

千葉開府の日記念

# 千葉氏フォーラム議事録

1部／講演

講師 田中 大喜 氏(国立歴史民俗博物館准教授)

テーマ

「常胤のおもてなしー治承5年正月1日の垵飯の歴史的意味ー」

■平成29年6月4日(日)

■千葉商工会議所第1ホール

○田中大喜（国立歴史民俗博物館准教授） 皆さん、こんにちは。ただいま御紹介にあずかりました国立歴史民俗博物館の田中と申します。30分という短い時間ではございますが、よろしく願いいたします。

今回のフォーラムのテーマは、千葉氏を通して現代につながる鎌倉時代の食文化を考えてみようということでございますが、千葉氏と鎌倉時代の食との関係を考えようとするときに素材になりますのが、先ほども名前が上がっていました<sup>かき</sup>焼飯という幕府の儀礼でございます。焼飯というのはなかなかなじみのない言葉かと思しますので、私の方からは、この焼飯というのはいかなる儀礼か、そして常胤がこの焼飯を務めた意味というのはいかなるものなのか、ということをお話ししたいと思います。具体的な内容はこれからお3人の先生方がお話しになるとしますので、私はその露払い的なお話しをしたいと思います。

ではまず、焼飯とはいかなる儀礼かを確認したいと思います。お手元のレジュメには、『平安時代史事典』という信頼性の高い事典から焼飯の説明を引用しましたが、ここには次のように書かれています。「焼飯とは『人を饗応する<sup>かしわべ</sup>膳部<sup>てんぶ</sup>の一種。焼に高く盛った<sup>ひめい</sup>姫飯のほかに、副食物や杯酒を添えた饗饌。宮廷の恒例・臨時の諸行事に朝臣たちにふるまわれた』」とあります。事典の名前のとおり、もちろん、これは平安時代の焼飯のお話しです。鎌倉幕府の焼飯はおおよそ正月の儀式として定着しますが、どうもこの事典を見る限りでは、もともとは正月に限定されない朝廷社会の慣行であったと理解されます。それが幕府へ導入されると、正月の儀礼として定着したと一応理解できることになります。

さて、この事典の説明の中で私が注目したいのが、傍線部を引いた「宮廷の恒例・臨時の諸行事に朝臣たちにふるまわれた」という部分です。この説明には主語がないので、一体誰が振る舞うのかわからず、また振る舞われた人たちはこれを本当に食べたのか、このような素朴な疑問を持つわけです。そこで試みに、平安時代の貴族の記録（日記）にある焼飯の記事から、これらについて確認してみたいと思います。

平安時代の<sup>かん</sup>寛和元年（985）ですが、藤原<sup>きねすけ</sup>実資という貴族が自分の娘の出産祝いで焼飯を行いました（史料1・『<sup>しょうゆうき</sup>小右記』寛和元年4月30日条）。娘が産まれたのでみんなを招いて宴会をしようというわけですが、この記事を見ますと、「女房<sup>ついがさねにじゅうさきのくらのさかんやすざね</sup>衝重 廿 前内蔵属保実、男方<sup>ないげんのてんげんあつより</sup>焼飯内膳典膳敦頼」とあります。いま注目したいのは、男方の焼飯を用意したのが内膳典膳敦頼だったという事実です。彼は菅原敦頼という人で、宴会の主である藤原実資の家来だった人です。貴族の社会でも、家来が焼飯を用意したことがわかりますが、続いて敦頼が用意した焼飯を「所々に分け給わしむ」と書いてある傍線部をご覧ください。この部分は、家来の敦頼が実資のために用意した焼飯が、実資によって集まってき

た人びとに分配されたと読むことができます。ということは、垵飯という儀礼は、家来が主人のために食膳を用意して献上し、主人はそれを参加者に分配（下賜）するというようにして行われたことがわかります。宴会に集まった人びと、つまり主人の慶事に集った人びとが、みんなで主人の側が用意した食膳を食べるという構造になっていたことが、ひとまずこの記事からわかることだと思えます。

史料1からわかることは以上ですが、平安時代の貴族の垵飯の記事には、実は宴会の主人が参加者と飲食をともにしたことがわかる明確な記事がありません。宴会に来た人びとが飲食したというのは確認できるのですが、それを分け与えた主人については明らかにならないのです。そのため研究者の中にも、垵飯という儀礼では主人は飲食しない、つまり飲食するのはお客さんだけという見解を提示されている方もいらっしゃいます。そうしますと、何のために宴会を開くのが問題になりますが、それはお客さんとして集まった人びと同士のヨコの関係＝傍輩関係を確認するためということになるようです。

さて、翻って武家について、幕府の垵飯は一体どうだったのかを確認してみたいのですが、史料2（『吾妻鏡』治承4年〈1180〉12月20日条）をご覧ください。史料2は、『吾妻鏡』に初めて出てくる垵飯の記事です。幕府最初の垵飯ということになります。

この垵飯は、頼朝の新邸において催されたものです。重要な記事なので読んでみますと、「新造御亭において三浦介義澄、椀飯を献ず。その後、御的始有り。この事兼ねて沙汰無しと雖も、公長の両息殊に達者たるの由、聞こし食さるるの間、件の芸を試させめ給う。酒宴の次を以て当座に仰さると云々」となります。

先ほど話しましたとおり、これは幕府の最初の垵飯ですが、垵飯を献上した人は三浦義澄という人です。千葉氏に匹敵する有力御家人ですが、最初の垵飯を務めたのがこの三浦氏だったわけです。三浦義澄の父、義明が頼朝の挙兵に応じて討ち死にをしますので、恐らくは義明の顕彰の一つとして、頼朝は子の義澄に最初の垵飯の役を務めさせたのだらうと思えますが、それは置いておきまして、いま注目したいのは、この記事の傍線部「酒宴の次を以て当座に仰さる」という部分です。

家来が主人のために垵飯を献上するというのは、さきほどの史料1と全く同じだと思えますが、この記事で頼朝は垵飯を献じられた後、的始をやろうと言っています。的始というのは、矢でのを当てるゲームですが、頼朝はそれを「酒宴の次を以て当座に仰さる」、すなわち酒宴の場でやろうと言いついたとあります。つまり、頼朝は宴会の場での的始を思いついたらしく、急にその場にいた人びとに呼びかけたというのです。多分、だんだん酔っ払ってきて興が乗ってしまったということでしょうが、「兼ねて沙汰無し」ともあることから、的始はもともと予定になかったことが明らかです。的始をやろうと言いついた酒宴とは、史料2の文脈からすると、垵飯献上後に開かれた酒宴だったと考え

るのが自然です。すると頼朝は、献上された垢飯を御家人たちと一緒に飲食したことになります。したがって、貴族はわからないのですが、武家の垢飯、少なくとも頼朝の垢飯では、主人と家来たちがともに飲食したと考えていいと思うわけです。

したがって、幕府の垢飯、将軍へ献上する垢飯というのは、主人と家来が同じ場で共同飲食をして、その絆＝主従関係を確かめ合うというのがやはり重要だったと思います。それに加えて、その場にはたくさんの御家人がいるので、御家人同士が頼朝との絆を介して結びつき合う関係＝傍輩関係を確かめ合うことがあったと思います。つまり、タテとヨコの両方の絆を確認するための儀礼だったと考えていいのではないのでしょうか。これが、幕府の垢飯の意義ということになると思います。この垢飯を三浦氏の次に務めたのが千葉常胤ということになりますので、次に常胤が垢飯を務めた意味とは一体どのようなものか、についてお話ししたいと思います。

史料3（『吾妻鏡』治承5年正月1日条）になりますが、年が改まった治承5年（1181）正月1日、常胤が垢飯を務めます。先ほどの三浦義澄の垢飯は幕府最初の垢飯でしたが、それは頼朝が新邸に引っ越しをしたときのお祝いでした。これに対し、常胤が務めたのは、幕府が初めて新年を迎えたときの垢飯であり、いわば幕府最初の年始垢飯を千葉氏が務めたということになります。これは皆様、よく知っている記事かと思いますが、「千葉介常胤、椀飯を献ず。三尺の鯉魚を相具し、また上林下若じょうりんかじやくその員かずを知らず」とあり、非常に豪勢な垢飯を献じたことが、『吾妻鏡』の中に記されています。

常胤が頼朝に献上した垢飯はかなり豪勢だったようですが、千葉氏が特別に豪勢にしたのかという点、どうもそういうわけではなさそうです。例えば史料4（『小右記』寛仁2年〈1018〉11月20日条）をご覧くださいなのですが、この傍線部のところを見ますと、「極めて豊贍ほうせんと云々」とあります。これも垢飯の記事ですが、藤原兼隆かねたかなる人物が献上した垢飯は極めて豊贍、つまりかなり豪勢であったと書かれてあります。どうも垢飯というのは、豪勢につくるというのが本来的な性質だったようでして、常胤も恐らくそういうことを知っていて豪勢な垢飯を用意したのだらうと思います。贅を凝らす性質が強いというのが、垢飯の特色と思うわけです。

垢飯は貴族や武士だけでなく、お坊さんも行いました。醍醐寺というお寺が御神楽のときに行った垢飯の内容を記した史料（「醍醐寺文書」承元5年〈1211〉正月17日付御神楽垢飯支配注文案）がありますが、ここからは、白米一合や菜十種、それに汁二種、酒、交菓子、折敷二十枚、箸、そのほか大豆や藁、炭、薪等々、非常に多種多様な内容が用意されたことがわかります。このように、お寺の世界でも垢飯はかなり豪勢に用意されたことがわかりますので、常胤もそういうことを意識したのだらうと思います。

そうしますと、次に、こういう多種多様な食材や食器等は一体どこから調達したのかが気になりますが、幸い醍醐寺にこのことを物語る史料が残っています。史料5（「醍醐寺文書」<sup>けんぼう</sup>建保3年〈1215〉6月12日付成賢拝堂饗膳支配注文文案）をご覧いただきたいのですが、ここには、「<sup>ろっぼんだてのきょう</sup>六本立饗」二膳と「<sup>かけばんのきょう</sup>懸盤饗」八膳の費用は<sup>うしがはらきたのしょう</sup>牛原北庄という醍醐寺の荘園が負担するということが書かれてあります。ほかにも、牛原南庄、柏原庄、<sup>なかばさみのしょう</sup>中夾庄、大野木庄が負担することが書かれてありまして、どうも醍醐寺は圀飯で使用する食材や食器を、自分の領地の中から調達したようです。これが1つヒントになるように思います。そうしますと、千葉氏も恐らくは自分の領地から圀飯の材料を集めたのではないかと考えられます。鎌倉から集めた可能性も否定できないのですが、それよりも、やはり当時の千葉氏が持っていた領地から圀飯の食材を集めたと考えた方がいいように思われます。

史料6（「櫟木文書」<sup>だいじ</sup>大治5年〈1130〉12月日付下総国司庁宣案）は、千葉氏が自分の領地を伊勢神宮に寄進する際に、下総国司がそれに対する許可を出した文書です。具体的には、相馬郡を寄進したのですが、これは常胤の父の常重が相伝した所領でして、ここに「土産の鮭」と出てきます。相馬郡では、かつて鮭がたくさんとれたことがわかりますが、こういう領地の土産＝特産品が圀飯に供されたと考えられます。このあたりについては、後で小倉先生の方からもお話しがあるかと思えます。

それでは、話を先に進めますが、そもそも年始の圀飯とは一体何のためにするのかと考えますと、それは幕府が無事に新年を迎えられたことに対する祝意を表明するための饗応と考えていいと思います。幕府の圀飯では、担当者＝圀飯を用意する人は常に1人です。ということは、その担当になった人は、全御家人を代表して主人である将軍に祝意を表明するという役割を負ったと理解できます。そうしますと、治承5年というのは先ほど申し上げましたとおり、幕府が最初に迎えた新年ということで、非常に大切な年だったと思います。つまり常胤は、発足間もない幕府の最初の新年を祝う饗応を全御家人の代表者として務めたといえ、大変な栄誉に浴したと理解できます。

注目すべきは、その後、<sup>けんきゅう</sup>建久4年（1193）まで、年始圀飯は常胤が独占して務めたという事実です。北条氏が務めた形跡は見当たりません。そのほか常胤は、治承5年6月13日の新御所移徙の<sup>いし</sup>圀飯や、<sup>げんりやく</sup>元暦元年（1184）10月6日の新造公文所吉書始の<sup>くもんじよきつしよはじめ</sup>圀飯を務めていますが、年始の圀飯をなぜ常胤が独占できたのかということをお話したいと思えます。

理由は幾つか考えられますが、まず私の頭の中にすぐに思い浮かぶのは、多分皆様の多くも同じだと思えますが、史料7（『吾妻鏡』治承4年9月17日条）です。ご承知のとおり、頼朝は石橋山合戦に負けた後、常胤を頼って房総半島へ逃れ、常胤は頼朝の挙兵に応じるわけです。感激した頼朝は、史料7の傍線部にあるとおり、「常胤を座右に招かしめ給い、<sup>すべから</sup>須<sup>し</sup>く<sup>ば</sup>司馬（常胤）をもって父となす

べきの由仰せらる」ということで、常胤のことを父として手厚く処遇するという、ほかの御家人には見られない厚遇を見せたのです。常胤は、頼朝から父になぞらえる存在として尊崇されたということ、やはりこれは大きな理由の一つになると思います。

その上でさらに注目したいのが、史料8の2つの記事です。史料8-1（『吾妻鏡』元暦元年11月21日条）のエピソードは、冒頭にある藤原俊兼としかねという人物を頼朝が叱った際のもので、このときに対比として出てくるのが常胤です。傍線部のところですが、頼朝は次のようなことを言って俊兼を叱っています。「常胤・実平さねひらの如きは清濁を分たざるの武士なり。所領と謂うは、また俊兼になら双ぶべからず。而るに各々衣服以下しか僉品そしなを用い、美服を好まず。故にその家富有の聞こえ有り。数輩の郎従を扶持して、勲功を励まさんと欲す」というのです。すなわち、常胤や土肥実平は、所領は俊兼と同じくたくさん持っているけれども、彼らは服には常に僉品を用い、質素儉約しているため経済的に豊かであり、その経済力でたくさんの家来を養って、戦時に備えているのだと述べています。つまり常胤は、軍功に励もうという心構えを常に持っている存在ということが強調されているわけです。

そして、史料8-2（『吾妻鏡』元暦2年〈1185〉3月11日条）を見ますと、これは頼朝が弟の範頼のりよりに宛てた手紙ですが、この中で常胤を褒めまくっています。傍線部のところですが、「千葉介常胤、老骨を顧みず、旅泊を堪え忍ぶの条、殊に神妙。傍輩を抜き、賞翫しょうがんせらるべき者か。凡そ常胤およの大功においては、生涯更に報謝の由を尽くすべからず」と述べています。常胤は、平家との戦いにおいて、常に前線で戦いました。このとき、常胤は64歳になっていたのですが、まさに老骨を顧みず戦功に励む常胤の姿を激賞するわけです。常胤は頼朝から父として尊崇されたこと、さらに老体で従軍奉公の実績を積んだことが、『吾妻鏡』に書かれているのです。

したがって、父、老体、そして戦功という、この3つの要素において、常胤が御家人たちの中で抜き出る存在であったというのが、『吾妻鏡』で書かれている常胤像になるわけです。いずれの要素も重要ですが、年始の堀飯のことを考えたときに、あえてどれが重要な要素だったかを考えますと、やはり老体という要素だったと思います。なぜかと申しますと、現在もそうですが、特に前近代では加齢が当然でない僥倖を意味したと考えられます。いまでも長寿の方はめでたい存在と我々は観念しますが、それは鎌倉時代ではなおさらのことだと思えるわけです。しかも、私たちは鎌倉幕府が成功するのを知っていますが、常胤が生存していた当時の幕府は、平家との戦いを経た後も、いつ崩れてもおかしくない状況にありました。よって、先行き不透明な幕府の新年の門出を祝うという役割は、幕府の構成員＝御家人の中で長命という僥倖に恵まれた人物、すなわち常胤こそがふさわしいと認識され、ずっと常胤が堀飯を務めたのだらうと考えられるわけです。

いろいろと小難しい史料を出してお話ししてしまいましたが、私の方からは以上にさせていただきます

ます。どうも御清聴ありがとうございました。(拍手)